

平成29年度 第2回 会員・家族研修会 開催

平成29年度第2回会員、家族研修会は平成30年3月4日(日)午後3時から午後5時まで、滋賀県婦人会館1階会議室で開催されました。青木事務局長の開会の言葉に続き西浦会長より「この研修会は断酒の意識付けに必要なものであり、参加受講される事が断酒実行の糧である」と挨拶がありました。

はじめに、副会長 北見敏子氏の体験談発表がありました。夫の暴力から逃げて大阪の母子寮で子ども達との生活、お酒でぼろぼろになり、相談員に勧めて貰い、小杉クリニックを受診しました。「北見さんよう来てくれたね、よう辛抱したね」とやさしく声をかけて頂いた。毎日のように通院するなか、断酒会を勧められて出席しました。私は人のせいにして飲んできた。夫の暴力がひどいからといって酒を飲んでいた。私の眼には、幼い子ども達の姿が見えていませんでした。只、「夫が憎い殺してやりたい」の感情で飲んでいました。足を運んだ例会で夫の来る日も、来る日ものだらしない姿、失禁の始末、もう殺して楽になりたい気持ち一杯になったとき、子どもの存在が私を止めてくれました。酒がなければよい人だ。子ども達の父親だと話す家族の体験談で、気付かせて貰いました。その時、私は母子寮での幼い子ども達との生活、子どもはどんな思いで見ているのか、幼い子どもの唯一の抵抗は背がやっと届くかどうかで、流しへ酒を捨てる事。例会通いが定着した。私のお酒で子どもたちに悲しい思いをさせてきた。例会に通い酒を止めて行こうと思えますと語られた。

この後、守山心のクリニック、精神保健福祉士 奥田由子ソーシャルワーカーによる「セクシャルハラスメントを考える～仲間を大切にする断酒会であるために～」と題し講演があった。はじめに～飲酒に悩む人々を援助する立場から、皆さんに願うこと～

- ①酒害と向き合う体験談を例会で語り続けること、断酒会員であることを、誇りにしてほしい
 - ②酒の問題に悩んでいる人たちに、私たち援助者が安心して紹介できる断酒会であってほしい
- 断酒」は手段にすぎない、仲間の中で「人間性の回復」をめざすこと
- ・【仲間の体験談は、自分の姿を映す鏡】自分一人では酒害を振り返り、見つめ直すことが難しい
 - ・【家族や周囲から自分はどのように見えているか】相手の立場を思いやらないと、人の痛みもわからない
 - ・【人間関係における力の差(力関係)に気づいているか?】上下関係(支配と服従の関係)にならぬよう
 - ・【互いの「人権」を尊重しているか?】について話があり、そして「女性の人権」を求める世界的な流れについて、現在に至るまでの歴史を話された。その後、例会等でのセクシャルハラスメントについて話された。

セクシャルハラスメントを考えることは、仲間を大切にする断酒会をつくること

- ・職場ではセクハラ研修・パワハラ研修が義務づけられ、職場で許されないことは断酒会ではなおさら!

どうしたら嫌な思いをしない「参加してよかった」と思える断酒会になるか一人ひとりが意識する・「好意」「冗談」のつもりでも、性的でプライベートな領域の「境界」侵犯をしていないだろうか?・同じ言い方を地位のある相手にも言うか?自分が(自分の娘や妻が)言われたらどう感じるか?・誰かが嫌な思いをしたのではないかと思っても、見て見ぬふりをして、その場をおさめていないか?・自分の感覚や価値観を押し付けるのではなく、例会や運営のルール(「指針と規範」)を大切にしているか?・「自分はそんなことしない」と過信して、周囲の注意や苦情に耳を貸さなくなっていないか?・弱い立場の人が「NO!」を言いやすい、不満を丁寧に聴いて一緒に考えられる断酒会だろうか?

セクシャルハラスメントについて考える講演であった。松岡副会長の閉会の挨拶のあと終了しました。参加者は46名でした。

(記・西浦)